

今月の特選句 八木健選

耳元の蚊は献血の泣き落し (西 をさむ)

「献血」だけでも可笑しいのに「泣き落し」で俄然面白さが増した。「ひとひねり」ではなく「ふたひねり」だから「おひねり」飛ぶことに

真打の一言とちる村芝居 (高田敏男)

「真打」は「とちらない」という思い込みが裏切られたから「可笑しい」ことになったね。端役までとちりまくって客怒る では困るぜ

マスカラを車中で着ける半夏生 (種谷良二)

「半化粧」と洒落ましたね、「車中」は電車ですか。なにが可笑しいかと言えば、揺れるからうまく着けられない。額につけてしまう風景

田圃の水で半身浴の蛙かな (秋月裕子)

蛙の目越えてさざなみ・・・なんて名句がありました。あれは単なる写生。こちらは、写生句ながら半身浴という「決め付け」が卓抜。

飛び火して蛍火ひとつまたひとつ (山下正純)

蛍の光がひとつづつ増えることを「飛び火」と見たところが〈非常識〉の可笑しさである。こういう句を見ると非常識な人間が羨ましい。

胃の腑では呉越同舟薬の日 (麻生やよひ)

胃薬ですか？消化を促す薬と、胃酸を抑制する薬をあわせ飲むとか催眠導入剤と覚醒剤をとか。謙遜しながら自慢するとか・・・あれれ

今月の秀逸句 七七をつけてみました

けものめく花栗の香の中にあて (高橋 都)

・・・急に恋しいあのひとのこと

西瓜割る新陰流の剣道部 (前川敏夫)

.....粉々にして叱られたりも

初蟬や羅漢五百に千の耳 (飯塚ひろし)

.....蟬時雨には耳をふさぐや

電話線に盗聴してる青大将 (黒澤正行)

.....携帯電話蛇に見せるな

性格の几帳面なる尺取虫 (井口夏子)

.....天道虫は落ち着きがない

物忘れ殊に馬鹿貝くうてより (佐藤古城)

.....馬鹿貝食ったことは忘れず

父在りし頃は父の日ないがしろ (白井道義)

.....自分が父になって気づくや

含羞の白百合みんな横を向く (加藤 賢)

.....最近の人含羞読めず

早乙女と言われ老人借り出され (高田敏男)

.....「元」の字をつけ忘れてだけよ

魚屋も八百屋も消えて蠅は暇 (田村米生)

.....そのうちになる絶滅危惧種

扱ひはご存分にと竹婦人 (横山喜三郎)

.....一夜を誰に任せようとも

手術後の臍のずれたる菖蒲風呂 (松田吉憲)

.....どこかが人と違つて値打ち

イケメンを凝視出来たるサングラス (久松久子)

.....肌身離さず携帯すべし

青山桂一

大版のカステラ並ぶ麦の秋
梅雨晴間拳になれぬ雲のあり
夾竹桃煤塵吸ひてあかあかと

秋月裕子

田圃の水で半身浴の蛙かな
せわしさが嬉しい梅雨の晴間かな
殿方の通勤疲労梅雨の底

高田菲路

うは言は芸能の真似抱き枕
握手さるレース手袋選挙前
漫画描き警策を享く夏書かな

高橋マキコ

爆睡の吾を雷鳴一喝す
ひまわりを豪快に活け父の日よ
街灯に暴かれて居りアブラムシ

麻生やよひ

胃の腑では呉越同舟葉の日
フィクサーは姿を見せず蟻地獄
万緑や猿山のべつ小競り合ひ

足立淑子

待ってますと帰る燕に言い付ける
凶作と予断を持つただけのこと
もぐりだねこの九年母を知らぬとは

有富洋二

先頭に騙され走る目高かな
島の子の魚の名知らず洗い髪
片目ずつ昼寝して見る二番館

有吉堅二

汗ぬぐふ広き額の限りなく
扇風機視線の合へばそつぽ向き
祭の夜焼け棒杭に火のつかず

安藤淑子

ああ言へばこう言ふ爺と梅雨座敷
郭公を結構と聞く夫婦ゴルフ
バラ散れど吾散らず迎へる誕生日

飯塚ひろし

冷奴技も奥義もなかりけり
浴衣着て携帯電話首に吊り
初蝉や羅漢五百に千の耳

井口寿々子

気がかりのほぐれてほつと蛍の夜
置物と思ひし蛙とび込みり
自転車の荷台にぼんと夏帽子

井口夏子

性格の几帳面なる尺取虫
流し麵前に陣取りやよかつたに
へそまがりひねた胡瓜のぶらさがる

池田亮二

衣更えあやしき肩のキスマーク
荒庭の後家猫長命惚けもせず
金剛力士醜男なれば蚊も食はず

高橋 都

万緑の一葉我家の雑草も
夕涼み植物談義が孫自慢
けものめく花栗の香の中にゐて

高橋素子

蚊の一匹湯あみの吾に纏ひつく
ごきぶりへもぐら叩きの腕揮ふ
社会制度に疑問のあらず蟻と生れ

高松雄三

吸ひ込まれそうな寝息や夏蒲団
わわわわわ投げ得意なあめんぼう
東京に空ありますよ空梅雨の

田代陽光

マドンナは永遠の憧れアマリリス
子規の代の蚊の末裔に刺されけり
それぞれに夏柑もらひ百地藏

田中章子

すきとほる手足自慢の雨蛙
昼寝覚壺より出でし心地せり
白玉の祖母の指あとのこりけり

田中勇

紫陽花の好きな裕ちゃん雨男
向日葵の好きなゴッホや耳を殺ぐ
貧血の氣息奄々蟬の声

谷 むつみ

竜宮を追ひ出されたる海月かな
デジタルに未だなりきれず時計草
ゴキブリの速さに負ける喜寿と古希

種谷良二

後姿ゆかしき日傘美人かな
汗吸いて重き朝のパジャマかな
マスカラを車中で着ける半夏生

田村米生

魚屋も八百屋も消えて蠅は暇
尺蠖の目測だけですましけり
道をしへ借金取りを案内して

伊藤浩睦

朝凧やセーラー服の男たち
菱畳の上の睡蓮泳げぬ子
クールビズ役所で甚平着てみたら

稲沢進一

含羞草美しきものは控へ目に
よろこべば歯にはよく染みかき氷
尺蠖やトリアスロン通り過ぐ

今城夏枝

予定表の空欄目立ち梅雨に入る
近づいて百合の激しき香を覗く
しがみつく枝に迷へり蝸牛

越前春生

ダービーの当り馬券をお守りに
大方は馬券の当る夏競馬
節約とけちとのちがひ冷奴

奥脇弘久

父の日に祝ひの馳走持て余す
胃袋に恙なきやと泥鰌汁
白百合の香のつよすぎて逃げ帰る

岡部一兆

釣つて来た蛸俎板を踏んぱりし
わら灰で鰹を焼いて天下飲む
縦縞の鰹ぶら下げひよつこりと

笠 政人

舶来の蚊帳吊草は鬼にやれ
老公の楯妖艶に百合香る
先づ祓う茅の輪くぐりし股間かな

可知豊親

石段を急ぐ蚯蚓の九十度
蠶螂の納豆のごと生れ出づる
尺蠖の物指をゆく律儀かな

加藤澄子

ひばりの忌リング追分口ずさみ
天の川独り渡りしはやぶさ号
剣道の汗の子龍馬の顔をして

加藤 賢

唸る蚊に腕差し出してじつと待つ

飛田正勝

父の日の来るたび母は強くなる
殿は父の二輪車麦の秋
鎌倉の駈込み寺の七変化

中岡久美子

泥にまみれて私はへぼ胡瓜
再会の叶はず梅雨の一周忌
トコロテン夏の香りを連れて来し

永井一朗

手の内は見せぬ蜥蜴の尻尾切り
城もため殿様蛙気ままなり
鮎冥利きれいな人に骨抜かれ

永島董玉

あざとさがものにでてある更衣
好事魔の取付きやすき木下闇
さみだれの水掛地蔵水かけて

西 をさむ

焼酎に心許無き大地かな
すててこや向時もふぐりは左寄り
耳元の蚊は献血の泣き落し

八木 健

どう見ても垂れ眼ナス型サングラス
雨乞ひを一芸として雨蛙
百年に一度と威張り梅雨出水

彦阪義久

永田町議事堂に咲く振り花
汗流す夢ばかりなり半夏生
白日傘大局してをり黒日傘

久松久子

イケメンを凝視出来たるサングラス
丸い地球四角に区切り田水張る
万緑に囲まれ日本拡いとも

日根野聖子

趣味といふほどのもの無し目高飼ふ
草矢受く満身創痕になりきつて
深夜早朝不法侵入油虫

広瀬雅幸

六月の気象予報土意気込めり

唇に口寄するとき青しぐれ
含羞の白百合みんな横を向く

川島智子
選挙戦・ワールドカップ・夏祭
ごきぶりを悪と決めつけ叩きけり
心天五臓六腑の洗はるる

川高郷之助
冷奴家内いつしかオッカナイ
玉の汗へばのゴルフの打数ほど
花栗に育毛剤の完敗す

北村マコ
一息にことごとの緑吸ひこみぬ
蛩来いこの暗闇をくぐり来い
夏燕なり高く飛び低く飛び

久我正明
鶯やのどを痛めてうがいして
口の中皴を作って梅を食う
水を張り田んぼの中を更衣

工藤泰子
夏蝶に囁きたてらる好奇心
枯れるまで色変へたがるしちだんか
忍冬吸ひて禁煙すると言ふ

黒田忠一
困つたな赤くならないサクランボ
かつこう良く郭公鳴くよ明けの畑
梅雨晴間朝から晩迄畑にみし

黒澤正行
尺蠖のへこりへこりとまたへこり
ぐずる子に雷の一喝ききにけり
電話線に盗聴してる青大将

小杉隆
ライオンは醤油もつけず馬刺かな
庭石のこの日姫なり達磨顔
吉野屋の牛丼食ふてる能国宝

酒井鹿洋
新入生振り仮名つけて出席簿
恋猫の四つ眼重なる闇の中

ゴキブリを逃せし夜の寝付かれず
ビール好き割り勘なるも遠慮せず

藤岡蒼樹
炎天や展げる熬子真つ白に
腹当に伝ふ涎や前歯生ふ
白南風や越中禪橋に立ち

藤森荘吉
夏料理何でも塩で食べる奴
サングラスかけた時から行楽地
六月も買つてしまひぬ宝くじ

藤原セツ子
麦秋をまつすぐに割りバスの行く
セールスの電話の魔法さみだるゝ
翼欲し梅雨の晴れ間を飛ぶための

坊野念寿
七変化しても天日照返す
古団扇そろそろ鴨居降りるかな
川トンボ釣れない竿は見縊られ

前川敏夫
七変化終はどろんと消えて欲し
西瓜割る新陰流の剣道部
抱擁を解くまづめまとひ纏ひつく

松尾軍治
クラス会ベルトゆるめる薄暑かな
水無月や月のものなし三カ月
新妻と蚊帳吊る夜のはやさかな

松田吉憲
女教師の汗なつかしき参観日
毛虫這ふ百萬円の寄進石
手術後の臍のずれたる菖蒲風呂

丸山紘一
ギフ蝶の命ほどなる総理の座
黴雨入りて蚯蚓蛞蝓に螻蛄
舟遊び冥途土産と清水寺

三木蒼生
梅雨寒の鬼籍に入るといふ奇跡
ヨン様とサッカーに夜の明け易し

恋猫の応酬つづく夜更けかな

酔ひ隠し黴の生えたる嘘ひとつ

桜井宇久夫

汗拭ひ貼りし膏薬斜めなり
うつちやつておけばよかつた蠅殺生
缶ビール開ける苦勞や怪我の腕

三塚不二

黒板のメニューに見入る日焼けの子
線香を振じ伏せてをり百合の花
喧嘩をする声も筒抜け軒簾

佐藤古城

物忘れ殊に馬鹿貝くうてより
露地の花問はれシランと答へけり
木魚から冬の蚊たたし漱石忌

三橋一笑

笑ひ出す青芝踏みし足の裏
潮干狩尻突き出して鍵渡す
漕ぐ銀輪先の先は夏の海

佐藤義子

ほととぎす他人の寝床子育てよ
熊の糞違ったキツネ冷や汗よ
花々に逢いたさ見たさ山登る

村上美和

遠足の児は先生をひつぱつて
蜘蛛の囿を除けたつもりが蜘蛛の囿に
ビル間の疲れ果てたる鯉幟

佐野萬里子

麦刈られ雲雀は戻る所なし
冷房は苦痛となりしかき氷
赤福氷抹茶の中に餡と餅

百千草

順番を待つ子駆ける子天瓜粉
夏椿ちよんと束ねし母の髻
向日葵や生涯とほす臍曲り

澤田鳶恵

水神のうたたねにムチくれ梅雨出水
さみだれやなめておいしいアメもある
はばかりや団扇の美人にみつめられ

森 要

雷が何だと蛙素つ裸
未広に元気な香澱栗の花
塩摘めばお頭暈るかかたつむり

首藤虎男

五月蠅と叩けば痛み霧吹かす
流れ星あれが女星や川渡り
猿すべり敬遠ならず去るコーチ

森岡香代子

お昼寝の気象予報の雨蛙
雨の糸袖ひで苔の花になる
新聞紙警棒となりて百足虫打つ

壽命秀次

実つても頭を下げぬ麦の秋
ぺちやぱいも出しやばりたがる更衣
蚩狩りおばちゃん達は厚化粧

柳澤京子

札ひらり師は百歳の生身魂
炎天下父さん倒る宿倒産
届きしは丸くなれと豆ごはん

柴田真一

あばれ梅雨割れ鍋叩き世を拗ねて
外は梅雨内は亭主の高斟
異国より梅雨はね大名立葵

山下正純

さくらんぼ一韻種の読経せり
飛び火して蚩火ひとつまたひとつ
目の中に飛び込む空や海開き

清水吞舟

汗かきし我が来し方を良しとせり
縁起良き夏帽被り職探す

山本あかね

葎切や日の丸弁当子は知らず
かたつむり大志抱きて木に登る

サングラス掛けても妻の千里眼

にはとりの瞬きしきり走り梅雨

白井道義

父在りし頃は父の日ないがしろ
肩書きの取れて気儘に更衣
巫女の裾さつと祓ひし青嵐

山本けい子

何故か徒花ベランダの茄子の花
伊根の夏かもめに餌をやりもして

杉村福郎

螢狩つかむ手首の太さかな
パックして一皮むけり蛇の衣
父の日の裸をのぞく女の子

山本 賜

あの人も透明な傘夏の雨
恋人へティッシュにくるむ小判草
黒揚羽渋谷の交差点に消ゆ

鈴木和枝

蛤蟪が息に向き替え梅雨休み
カードが吸い込まれて誰かと話してる
田廻りのおたまじやくしに負けていた

横山喜三郎

扱ひはご存分にと竹婦人
荒みし世辟易せる魂送りけり
結局は全部捨てられ茸狩

鈴木 哲也

炎天や岸辺で休むカメさんよ
青空や木をよじのぼるカブトムシ
短夜や窓のすきまに清い風

吉野香風子

さうめんの喉越し重し驟雨なり
大根引く胃袋の調子尋ねては

高田敏男

公約の通りにならず袋掛
早乙女と言われ老人借り出され
真打の一言とちる村芝居

渡辺さだを

ブブゼラの唸りて世界短夜に
麦秋や厩舎を空にする悲劇
役人を愛想よくするアロハシャツ

渡邊美代子

ラーメンは硬く茹でろと終戦日
敗戦の日釘を海に投げし少年
足の爪ピンクに染めて藍浴衣